



TITLE:

唯物史観の第三史観への接近

AUTHOR(S):

高田, 保馬

CITATION:

高田, 保馬. 唯物史観の第三史観への接近. 経済論叢 1933, 36(6): 897-915

ISSUE DATE:

1933-06-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130325>

RIGHT:

京都市大學經濟學會 經濟叢論

第六號

第三十六卷

昭和八年六月一日發行

論叢

唯物史觀の第三史觀への接近……………文學博士高田保馬
我國の國民所得……………經濟學博士沙見三郎
爲替心理說評價……………文學博士米田庄太郎

時論

異常所得の課税……………法學博士神戸正雄

研究

フランスにおける爲替動搖と安定策……………經濟學博士谷口吉彦
わが國に於ける百貨店出張販賣の發展……………經濟學士堀新一

說苑

ナダム・スミスに於ける經濟史觀……………經濟學士白杉庄一郎
英國に於ける預金の流通速度……………經濟學士大野榮一郎

附錄

新看外國經濟雜誌主要論題
本誌第三十六卷總目錄

（禁轉載）

經濟論叢

第三十六卷

第六號

(通卷第貳百拾六號)

昭和八年六月發行

論

叢

唯物史觀の第三史觀への接近

高田保馬

一

唯物史觀の解釋については近時異說紛々として生じ、其歸一する所を知らぬ姿にある。大體から云へば、その解釋の仕方は漸次ある方向に向つて變化しつつある。此變化の方向が私にとつて頗る興味が深い。私は唯物史觀の云はば傳統的なる解釋に對して、私の社會學的史觀、即ち第三史觀を對立せしめた。然るに唯物史觀の解釋に於ける近時の動きは、一步一步此第三史觀の主張に近づきつつある。何故に私はさう主張しうるか。

第三史觀は生産力に對する生産關係の能動作用を主張する。而して更に進みては生産關係、延

いて社會關係が人口的因子によつて決定せらるること、人口的因子が著しく自己運動的性質をもつことを主張する。生産關係が何によつて動くかと云ふ點について、それは唯物史觀と相分れる。傳統的解釋に於ける唯物史觀によれば、生産力によつて生産關係が決定せられる。生産關係は生産力によつて決定せらるるところの云はば受動的因子に過ぎぬ。然るにその新しき解釋は生産關係を受動的のものと見ず、それに著しき範圍まで能動的作用を認める。従つて生産力の動きが生産關係によつて左右せらるるばかりではない、生産關係は生産力の作用を離れて自らを形成する餘地をもつてはすである、さうでなくては、其能動的作用と云ふものは考へ得られないから。かくて唯物史觀は其新しい解釋に従ふとき、愈々生産關係の能動性を高調する。此變化をもち來した事情は如何なるものであつたらうか。私はそれに二を數へ得ると思ふ。其一。生産關係の能動性ことに其生産力に及ぼす作用を高調せざるときには、技術の發達の未だ十分でない場合に於ける社會主義的努力の意義が失はれ易い。其二。唯物史觀をマルクス文献に於ける公式の文字としてではなく、それを以て現實の歴史を説明するものと見るときには、やはり生産關係そのものの能動性を認めざるを得なくなり、従つてこれを生産力によつて決定せらるるものと、單純に見がたくなつて來たのであらう。

このうち、前の點については、多少の説明を要しよう。生産力が能動のもの、自己運動的のものであり、生産關係がこれに従つて動くものであるならば、云はば此二者の間に機械論的な

關係があるものならば、生産力の發達が十分でないところに、社會組織の變革を行ふことも徒勞に終るであらう。發達せざる生産力はやがてそれに應じたる生産關係を確立せしむるに至ると考ふべきが故である。ただ生産關係によつて生産力の發達が助長せらるることを、従つて前者の能動的作用を、十分に認むる場合に於てはそこにはじめて、社會組織の變革が新なる意義をもち得る。而して生産關係の變革が生産力の躍進的發達を促し後者はまた生産關係の變化を促す。かくして來るべき社會への前進が實現せらるることになる。かく考へ來れば、今日急進的に社會組織を改めようとする立場から要求せらるるところの唯物史觀はもはや、その傳統的解釋に於けるそれではない。それは、生産關係の能動性を認むるところの、新しい解釋に於けるそれではなくてはならぬ。而してかくして、新なる解釋を加へられたところの唯物史觀は、私のかつてそれに加へたる批評に一步だけ副ふものとなつてゐる、云はば第三史觀の方に接近してゐる。而して、その中に於ける不合理的分子と私の見るものを取除きさへすれば、それは第三史觀に歸着する。

二

唯物史觀の傳統的なる解釋と私のよぶものは、長き間、マルクス學者の間に支配してゐた見方である。その一例としてたとへば、ブレハアノフ近くはブハアリンの見解をも擧げ得るであらう。かかる立場はもとより、生産力と生産關係、及びこれらと上部構造との間に於ける相互作用を認めないわけではない。けれども根本に於ては、生産力によつて生産關係が決定せられ、生産關係

によつて法律政治及び精神的文化等の諸事象が決定せらるることを認める。而して此見方は、所謂機械論的解釋(たとへばブハアリン)と稱せらるるものに於て其絶頂に達する。私はここに、問題の重點を生産力と生産關係との關係に置かうとする。かかる立場から、生産關係は一定の技術狀態に應ずるところの「時間空間に於ける人の配置」として考へられ、「階級的生産關係」が、「生産過程に於ける社會階級の技術的役割から、技術的機能から、直接に發生する關係として解釋せられる」。

生産力によつて生産關係が決定せらるると云ふ見方は、マルクス學說の解釋として誤つたものであるとは思はない。而して此際、生産力が何を意味するかについては種々なる異論がある。けれども傳統的なる見方に於ては、その中、生産技術が最も重要視せられ、生産力の變動の決定的なるものは技術の動きに外ならぬものと考へられてゐる。かう云ふ見方をすると、生産技術の變動につれて生産關係が變動し、これにつれて上部構造もまた變化する。勿論労働の組織の動きが生産力の動きであることは、屢々マルクスによつてのべられてゐるが、此労働組織もまた生産手段従つて生産技術によつて制約せらるるものと見られてゐる。さうすると、労働手段を以て人間労働の生産力の發展の測度器であると云ふこと、遺骨から生物の構造が分るやうに、道具によつて社會狀態の推測がつくことなどの思想が十分に理解せられる。此點について、傳統的解釋に反對するものは、次の如き見方をとる外はないであらう。生産關係が單に生産力に順應するもので

あり、前者が後者によつて決定せらるると云ふ見方をすると、生産關係の現にもつ能動作用が否定せられる。けれども、生産關係の能動作用を認めるとなると、同一の生産手段乃至生産技術が異なる生産關係と結びつくことを十分に認めねばならぬ。即ち生産手段は生産關係Aと結びつくばかりではない、生産關係B又はCと結びつくこともまた可能であるはずである。生産關係自體生産力の作用から獨立に動き得るものとするときには、これは當然の結論でなければならぬ。しかしさうなると、同一の労働手段を利用するにしても生産關係の如何によつて労働の生産力は異なるはずである。労働手段が労働生産力の發展の測度器であると云ふことがどうして云はれ得るか。勿論測度器であることは原動力であることと同一の意義のものではない(メドヴェージェフ)にしても、労働手段が労働生産力の測度器であると云ふ意義は失はれねばならぬと思ふ。道具が社會狀態(上部構造をも含めて)の指標となると云ふことについてもまた同様である。勿論此點については、唯物史觀の新しい解釋をとる人人の間に相當の言分もあるが、それには後に論及する。けれども、労働手段が労働生産力の指示器であると云ひ、労働手段の遺物が所謂「社會的經濟的構成態」に對してもつ意義を遺骨の生物有機體に對してもつ意義と同じやうのものとする見方は、これを貫き徹すときに、傳統的なる解釋としか容れ得ないものではないかと思ふ。此意味に於て私がかつて、傳統的解釋に於ける唯物史觀を考察の對象にとつた事は、誤つてゐるわけではない。

さて此の如くに解釋せられたる唯物史觀に對して、私は如何なる批評を加へたか。生産力によ

つて生産關係が決定せらるると云ふことは云へぬ。勿論生産關係の形成が生産力によつて何等の作用をも蒙らずと云ふのではないが、生産關係は生産力によつて十分に決定し盡さるるものとは云ひがたい。生産力は生産關係を決定するところの數多の因子中の一にすぎぬ。かかる因子として最も重要な地位を占むるものは社會關係である。生産關係もまた社會關係であると云ふ點から、此表現に不明の點があると云ふものがあるならば、次の如くに述べたい。生産と云ふ活動から離れて、各自の間に存する社會的の關係がある。これを純粹關係と云ふ事にする。此純粹關係が生産力と結びつくところに、一定の生産關係が成立する。従つて同一の生産技術が種々なる生産關係と相結合し得る。生産技術が一定の時間空間に於ける人的配置を伴ふにしても、かかる配置の意味するところは單なる技術的組織のみであらう。生産關係に含まるるところの生産手段の分配、従つて機能の分擔等に至つては、生産力自體から導き出されようはすがない。

かつて述べたるが如く、生産、即ち生活資料の生産は社會に於て生起したる事實である。個人が動物から區別せらるる所以の最初の歴史的行動は彼等が其生活資料を生産し始める云ふことである。此生産の發生は單なる孤立的の生活の間に行はれたのではない。「人間の本質は何等個々の個人に内在するところの抽象體ではない。その現實に於ては人間の本質は社會的諸關係の總體である」。初めて人間として自己を區別したる人間とても社會的諸關係の總體であるはずであり、社會に於てはじめて人間となつたものである。生産を營むに及びて、社會關係の著しき部分は生産

關係となる。社會關係の中に生れたる生産力は、それに先だちて存する社會關係と協力することによつてのみ、生産關係を成立せしめる。従つて、社會關係の如何は當然に、新に成立する生産關係の如何なるものであるかについて、決定的なる影響を及ぼすはすである。

同様な關係は征服國家の形成の場合についても認められる。生産技術の狀況は征服の前後に於て變化しない場合が少からずある。農耕民族が征服せらるることによつて新しき國家の形成せらるるが如き。此場合に於て、技術に變化なくして、生産關係には著しい變革がある。又新國家の成立が生産技術の變革を伴ふとしても、此場合如何なる部分的集團が支配者となり被支配者となるか、此支配關係従つて生産關係の様相は生産を離れてすでに成立するところの征服關係自體によつて強く影響せらるるはすである。此支配關係の様相が生産力によつて決定せらるることを高調するものはあるが、それを争はうとするのではない。生産力の事情がいかん支配の様式の上に影響するにせよ、征服關係自體の影響を外にして、此支配關係の内容が説明し得られぬと云ふことだけを認むれば、私の主張はとほるわけである。

生産技術、従つて生産力の動きと生産關係の動きとの平行しないことの如何に多かつたかは、屢々注目せられたる事實である。例へば支那に於ける生産技術は過去一千年の間（資本主義の輸入まで）殆どこれと云ふ變化を示さなかつた。それにも拘はらず、社會組織従つて生産關係は著しき變遷を示してゐる。手工業時代から工場工業に入るに當つても、生産技術にはさしたる變化

が示されてゐない。云はば技術の上にさしたる變化なくして、而も生産關係のみが著しき變化を示してゐる。而して新しき資本主義的生産關係がむしろ古き封建的技術を變革して、機械的生産をとり代らせたと見られる。一般的に見て同一の技術的基礎の上に生産關係は變革を遂げ、その上に新しき技術が成立するとすら見られる。

一方に於てかかる事實を正視したとせよ。而して他方に於て次の如き必要に迫られたとせよ。労働手段の性質から直接に社會の經濟的構造の性質が生じなければならぬ、と見る所の機械論的立場がとらるるとすれば、社會組織變革の努力の意義は著しく失はれてしまふ。此努力をして十分の意義あらしめ、將來社會の實現を促進するものたらしめようとするならば、生産關係の受動性が否定せられねばならぬ。

三

かくて、唯物史觀に對する新しき解釋が生れる。これによれば、まづ、生産力が單に労働手段として考へられぬ、生産力の動きが技術の動きと同視せられぬ。生産力の中に、労働力と生産手段(労働手段のほか、労働對象をも含むものとして)とが數へられ、而もこれらは一定の生産過程に於て結合せらるるときにのみ、生産力であると見られる。ここに生産力と生産關係との聯絡が考へられねばならぬ。労働力自體が生産關係によつて著しく影響を受ける。單なる抽象的労働力と云ふものはない、それは常に一定の生産關係の下に於ける労働力である。加之、労働力と生産

手段の結合の姿が生産關係の如何によつて左右せられる。此意味に於て、生産關係は生産力に對する破壊者となり又助長者となる、後の場合に、それはまた一の生産力として數へられる。かくして二者の間には相互滲透の關係がある。此點から二者は對立物として統一を形づくるもの、又形式と内容との關係に立つものとして考へられてゐる。

加之、注意すべきことには、生産關係が生産力によつて決定せらるると云ふ一面はもとより認められてゐるにしても、他面又それは生産力からある程度まで獨立に動き、而も、生産力の動きそのものを決定し得ると見られてゐる『歴史的發展は機械論者の圖式の方向を辿らず、初めに必ず技術が発生し、次に此技術に制約された經濟が生ずると云ふやうなものでは斷じてない。各の新しい生産様式は、その發生期にあつては、舊來の社會的構成態の胎内に見出す技術から出發する。新しい生産様式の發展は、それを舊來の技術的組織と矛盾に陥らしむるに至る。この矛盾は新しい生産様式がそれに適應した技術的基礎を作り出すことによつて解決される。例へば資本主義的生産様式は、舊來の手工業的基礎の上に發生して、封建的技術と矛盾に陥り、産業革命の時代に機械生産へと移つてゆかねばならなかつた。丁度これと同じやうに、過渡期に成長した社會主義は、一定の發達段階に達して、舊來の資本主義から傳はつた技術的基礎と矛盾に陥つた』『經濟的發展はそれ自身でも技術的基礎そのものの發展の起動力となる。原因と結果とはここで辯證法的に其位置をかへる』¹⁾。要するに、生産力と生産關係とは相互に滲透すると云ふばかりでなく、

生産關係が生産力によつて決定せらるると共に、生産關係が生産の動きをも決定する。かくの如くに見て來ると、社會的經濟的構成態の動きを決定するものはもはや、生産力であるとは云ひきたい。さうして、「我等は發展の原因を生産力及び生産關係の中に求めねばならぬ」(メドヴェージェフ)と云ふ見方をすら生ずる。

要するに、(1)生産力はそれに對應する生産關係を離れて、獨立に「それ自體に於て」存在するものではない。生産關係を生産力の上部構造、若くは其二階と見なすことプレハアノフの如くすることは避けられねばならぬ。(2)形式としての生産關係から生産力の動きが導き出せるものではない。社會的内容的發展を社會的形式的發展に還元しようとするメンシエヴィキ的觀念論はさけらるべきである。(3)さりとて此二者は、それぞれ特有の法則に従つて發展するところの、二の獨立したる力又は本質ではない。生産力は内容として形式たる生産關係を決定するにしても、生産力の發展は生産關係の內的なる法則、特殊の合則性によつて支配せられる、『生産力の發展を、生産關係から、つまり此發展の行はるる形態から獨立して、それ自身で發展するものとして觀察してはならぬ』『現實に於ては、資本主義の下に於ける生産力の發展は資本主義的構造の內的なる法則によつて、完全に規定せられてゐる。資本主義的生産の最も根本的な矛盾、即ち社會的生産と私的占有との矛盾は、マルクスの云へるやうに、有産者をして、其生産力をたえず、變革することを餘儀なくせしめる。かくて生産力は有産者による其利用が可能なるべき限界をこえて成

長するに至る²⁾』而して二者は形式内容として統一を（生産様式と見られ又は社會的生產と見られる）形づくる。二者は相互に作用するけれども、「ただ内容は一定の形式を指定すると云ふ意味に於て、形式に對して或る優位をもつ」ものとして、生産力に重點が置かれる。

さて、唯物史觀の新しき解釋に於ては、生産力がもはや單獨に成長しつつ生産關係を追ひこし、これを破壊してゆくものとしては、考へられてゐない。寧ろ、生産關係によつてその發達が支配せられ、生産關係もある程度まで發展の固有なる内在的法則をもつものと見られる。かくして、生産關係と生産力との結びつき方が多様であり、多義的でありうる事が明にせられる。これについて述べなければならぬ點として、第一。かかる見方では道具の遺物が當時の社會狀態を推定せしむる指標とすることは不可能であらう。第二。生産力と生産關係とを形式内容の關係に置き、相互の作用を認めただけでは、これらの發展が如何にして行はるるかを、十分に明にすることは出来ぬ。

所謂機械論的解釋について、私は以前に次の點を問題とした。生産力が自ら動いて生産關係を決定すると云ふ。けれども、生産力の自ら動くことが如何にして可能であるか。又生産關係は生産力以外のものによつて決定せらるるのではないか。従つて生産力との關係に於ては、むしろ生産關係が生産力の動きを左右すると見うべきではないか。而して新しき解釋は生産關係の生産力に及ぼす作用を強く認める。この限り、唯物史觀は社會學的史觀に接近したと云ひ得よう。けれ

ども、此新しき解釋の下に於ける唯物史觀はそのまま支持せられ得るであらうか。生産力と生産關係との相互作用を認むる限り、形式と内容との争闘を主張する限り、雙方に自ら運動を營むことを認めざるを得ないであらう。生産關係によつて生産力が全く決定せられ、又は生産力によつて生産關係が全く決定せられてしまふものならば、其ただ一方が自己運動を營むことが要求せらるるに止まる。けれども雙方が互に結果となり原因となるものならば、よし内容の優位を認むるにはせよ、共に固有なる自己運動をまたねばならぬであらう。従つて此新しい解釋は舊き解釋に伴へる一の困難——事實との不一致——を除き得たにしても、やはり、生産力の自己運動が如何にして行はるるか云ふ難問を残したるのみならず、また同様な問題を生産關係について加ふるわけになる。

生産力を自ら動くものとして、その發展の如何にして行はるかについての説明を斷念することは、生産力を「歴史に於て不明なる原因によつて不變に發展する超階級的なる範疇一般」に、又一の形而上學的實體としての神にまで祭り上げることである。如何にしてその動くかが當然明にせられねばならぬ。而してこのことは新に自己運動的地位に置かれたる生産關係についても、また同様である。今や二の神は、科學の地上に引き下されねばならぬ。而してその所謂自己運動の如何にして行はるかが明にせられねばならぬ。此課題が仕とげらるるとき、唯物史觀は唯物史觀ならざるものに流れ入らねばならぬ。第三史觀が唯物史觀にとり代らねばならぬ事情は、そこにある。

四

第三史觀は何を主張するか。それは根本に於て、生産力の自ら運動せず、生産關係の自ら運動せず、他の自ら運動するものによつて動かさるることを主張する。自ら運動するものは人口に外ならぬ。けれども、此主張に對して人はしばしば次の如くに云ふ。人口は常に自ら増加する傾向を有するにしても、其増加は生産力によつて制限せられる。生産力こそは人口の動きを支配するものではないかと此點について、私は二のことを述べよう。

(1) 『生産は人口の増加とともに初めて現はれる。人口の増加はそれ自身また個人相互の間に於ける交通を前提してゐる。この交通の形態はまた生産によつて制約されてゐるのである(ドイツチェ・イデオロギイ)』此命題は三に分たれる。人口と生産、交通の聯絡を述べたるものである。交通(これを社會關係一般と見得るはずである)を前提として人口増加が行はれ、人口増加に伴うて生産がはじめて現はれる。かくして現はれたる生産はまた交通の形態を制約する。従つて交通そのものは生産をまつてはじめて存するのではない。此交通を前提として人口が増加し、これに伴うて生産——人間の最初の歴史的行為——従つて生産力があらはれる。根本に於て、人口の増加は生産によつて制約せらるることからではなかつた。人口の増加こそは全く自己運動的な事からである。

(2) もとより生産が行はるるに至つてからは、生産力によつて人口の増加の限度が限られる。これは争ひがたい事實である。けれども人口増加の傾向自體、従つて人口の自己運動そのものは

生産をまつことではなく、生産に先だつ事がらである。生産力の動きそのものが人口増加によつて促進せられ實現せらるる以上、生産力によつて増加の限界をかぎり、又は擴張することは、人口自身の一の自己運動の結果に外ならぬ。要するに、生産力によつて人口増加の限界が置かるるにしても、これは決して人口の自己運動の事實そのものを否定する根據とはなり得ない。

生産なくして一日も生命が維持せられぬと云ふのは事實である。けれども、相互の交通なくしては一瞬と雖も人間の生活はあり得ない、人間の生活の營まるところ、相互の交通、即ち社會的關係はさけがたき事實である。人は此關係の中に生れ、その中に於てはじめて生きる。生産自體をまつて此關係があるのではない。此根本的事實は生産を生めるもの、生産の發達の道程に於て、それが生産の上に作用せずとは考へがたい。此意味に於て、私は社會關係こそは基礎構造として數へらるべきものであると思ふ。而して此基礎構造は根本に於て、人口の事情によつて決定せられる。

此點について、生産力と生産關係との動きを如何に見るべきかを考へよう。社會關係は其内部から必要に應じて生産を、従つて生産力をうみ、これにつれて自己のある部分を生産關係にまで作り上げる。社會は人口の増加につれて物資の増加の必要を感じる、此必要は何等かの競争の形に於て成員を壓迫する。云はば社會關係自體が人口の増加によつて新なる性質を帯びる。生産はそこに生れる。その後にはける生産力の動きもまた、社會關係の側からの壓迫、即ち生産關係化したる社會關係の壓迫によつて行はれる。このことは資本主義社會に於ける生産技術の動きが

如何に生産關係そのものによつて（社會的生產と私的占有との矛盾によつて激化せらるる資本家の競争）促さるるかを見るとときに、極めて明白となる。此意味に於て、生産力の動きは生産關係によつて生ずる。此生産關係は一方に於て生産力によつて、他方に於て社會關係によつて決定せられる。けれども、生産關係が生産力によつて定めらるる側は、前者が自己の生産物たる後者によつて定めらるることを意味する、それは事象の根本的方面ではなからう。従つて生産關係を根本に於て決定するものは社會關係であると云はなければならぬ。要するに、生産力も生産關係もともに自動的のものではなく、社會關係によつて促されて動き、社會關係によつてその形態を規定せらるるものである。此二者の統一である社會的生產、又は經濟はかくして社會關係によつて規定せらるると云ふ外はない。

社會關係自體の中から、組織的勢力としての權力と行動の社會的規範とが生れる。云はば社會關係の中からあるものが骨格化する。此骨格化したる部分が政治と法律との二者を形づくる。これらの二者について今詳論することは、之をさけよう。これらの上に及ぼす經濟の作用の顯著なることは十分に之を認めねばならぬけれども、此組織的社會事象は直接に社會關係の決定の下に立つわけである。此意味に於て、これは經濟に對する上部構造と云ふべきものではない。少くもこれと相並列して社會關係からの影響を受くるものである。精神的文化、即ち社會的意識形態がこれらに對して被決定的地位に立つことに關しては詳説する必要もないであらう。それらは一方に於て社

會關係の、他方に於て經濟及び政治法律の、影響を受ける。それは上部構造中の上部構造である。

以上は極めて概括的な主張であるが、これについてただ一點を附記して置く。それは經濟と政治との關係に關する。唯物史觀を主張するものの側からは、經濟によつて結局政治が決定せらるるものと見られねばならぬ。けれども、まづ國家の成立について考へよう。人口の増加によつて統制の必要を生じ、此必要から國家權力の成立する場合に於ては、經濟が直に政治を決定すると云ひがたいであらう。寧ろ、社會關係自體の事情から統制的機能の必要に基いて國家權力を生み出したと見るべきではなからうか。近代に於ける政治形態の變遷についてもまたさう考へ得る。資本主義が立憲政治を生んだと見るのは、本末の顛倒ではないか。社會關係が一方に於て資本主義を成立せしむるだけのものとなつてゐたからこそ、他方に於て立憲政治が此社會關係から要求せられ、成立したのである。否進みてかうすらも云ひ得る。社會關係の動きが政治と法律との云はば組織的事象に一定の變革を與へた。此變革せられたる法律政治の地盤の上にはじめて資本主義が成長し又成熟することを得たのである。此意味に於て、經濟によつて政治が決定せられると云ふよりも寧ろ政治によつて經濟が決定せられる。而して政治は其根本に於て社會關係、約言すれば社會の反映である。而も此社會關係を動かすものは人口の事情に外ならぬ。然らば人口の事情は如何にして社會關係を決定するか。社會關係の姿として如何なる方面が考へらるるか。

まづ、人口の事情が如何にして社會關係を決定するかを考へよう。此際まづ問題となるものは人口の數量であり、次には人口の質的構成である。けれども、社會の人口内部の質的差異が數量の増加に伴ふ隔離にもとづく、と見らるる以上、重要な意義を有するものは前者である。後者はただ附隨的意義を有するに過ぎぬ。

一の社會の人口の數量の小なることは其内部の社會關係をしてあくまで平等的ならしめ又共同社會的ならしめるであらう。云はば純粹なる共同社會の原理がそこに支配しやすい。人口が増加し、而も、それらが廣き地域に散在するに於ては、社會全體の統一の爲に一の權力的組織が要求せられる、これと共に、社會の秩序の維持のための規範が冷靜に此權力によつて支持せらるることとなる。而も、社會關係そのものは、成員相互の接觸の稠密ならざる爲に、共同社會的色彩を残留する。而して此共同社會の性質を帯びること強きだけ、そこに一體の意識が支配する。成員が相結合して一體をなすと云ふ意識は畢竟血縁の意識の形をとらざるを得ぬ。かかる事情の下に於ては社會の統一の原理、而して分節の原理が血縁のそれである。氏族を中心とする社會組織は此場合に成立する。社會の人口漸く増加し、交通の範圍更に擴張せらるるに及べば——此範圍の擴張にとりて、生産力の作用は否認すべきではない——もはや、血縁が社會組織の原理として支配しがたくなる。茲に於て、人格的結合、ことに支配者に對する忠誠の原理の上に立つところの結合が血縁的團結にとり代る。而してこれは畢竟、權力を中心として形成せらるる共同社會的團

結たならざるを得ぬ。此場合、社會の組織は嚴密なる體統的秩序の上に立つ。人口の増加なほ一層すすみ、相互の接觸なほ一層頻繁となるとせよ。個人の解放は始まらざるを得ず、共同社會の解體がはじまる。利益社會化は知らず知らずの中に進行する。此傾向の直接なる結果として、權力の支配、別して身分の制度が滅亡する。而して、自由契約が各人間の關係を支配するに至る。一方に於ては資本主義的經濟、他方に於ては代議政治がかかる共通の地盤の上に結實したる二のものである。進みて云へば自然科學の發達、個人主義的思潮、家族制度の弛緩と云ふが如きものも、すべて同一の根本傾向の所産として考へうべきものである。共同社會より利益社會へ、血縁の支配する社會から身分、權力の支配する社會を通して契約の支配する社會へ、即ち血液、權力、經濟の三段階の通過、國家法律の形成から階級支配の峻嚴なる段階を通過し、やがて階級懸隔の縮めらるる状態へ、これらの變動はすべて人口の動きによつて、促される。社會關係は人口の動きによつて、かかる諸方面の變動を蒙る。而して、經濟の動き、政治法律の動き、精神的文化の動きは大體の上から見て、此社會關係の變動によつて決定せらるる伴隨現象に外ならぬ。

私はくりかへして云ふ。生産力は自ら動くものと考へにくい、生産關係とてもまた然り。自ら動くものを求めても、これを生命の自己増殖、即ち人口増加以外に求むることは困難である。而して人口の増加こそは社會關係の作用を通して生産力を發達せしめて來た。生産力の發達はやがて勞働の生産性の増大であらう。然らば、マルクスとても私の主張するところを認めてゐる。『種

族意識はそれの一層の發展と發達とをば、生産性の増大、欲望の増加、及びこれらの兩者の根柢に横たはるところの人口の増加によつて獲得する』(ドイツチエ・イデオロギイ)。然り、生産性の増大は人口の増加を根柢として生じ得る事象である。人口の増加は生産性の増大、従つて生産力の動きに比して一層根柢的な動きであるはずである。此人口の自己運動は何よりもまづ、社會關係の上に作用する。人人が生きる爲に生産しなければならぬことは事實である。而も、生産するまへに相交渉しなければならぬことは更に確實なる事實である。此相互の交渉が人口の増加によつて何よりもまづ直接に影響せられずとは考へがたい。此影響はやがて生産活動そのものの上に及ぶであらう。

要するに、傳統的なる唯物史觀は生産力の自己運動、生産關係のそれによる被決定性を主張したけれども、生産關係が生産力によつて決定せられざる方面を有すること、あまりに明白である。従つて結局、その新しき解釋は生産關係の能動性を主張したけれども、生産力と生産關係の二者は決して自己運動者として考へらるることが出来ぬ、出来ぬと云ふのは事實が之を許さぬと云ふのである。歴史に於ける原動者を精神に求めるならば、それは一の道である。さうでない以上もはや之を人口に求むる外はない。人口が社會關係を直接に規定する。これは社會の下部構造である。經濟の動きの如きは此下部構造の動きの一の反映に過ぎぬ。第三史觀はこれだけのことを主張する。